【現代を考える】

いのち

●作家・エッセイスト
朴慶南（パク・キョンナム）

高校生を対象に講演をする機会が多い。タイトルは大抵の場合、これに決めている。

「命さえ忘れなきゃ」。

この言葉は、私の口グセでもある。いくら忘れものをしても、失敗をしても、命さえ忘れていなければ、どんなことだってなんとかなる、大丈夫という文字どおりの意味だ。

つまり、命を忘れてしまっては、もう絶対に取り返しがつかない。自分の命も他の命も、命は唯一無二のものであり、いちばん大切なものだということを表している。

結構、高校生たちにインパクトをもって伝わる言葉のようなのだが、もう少し説明を付け加えることにしている。

命には、肉体的なものだけでなく、精神的命というものもあるのではないか、それは、魂、尊厳、誇り（プライド）、人権……と言い換えてもよく、一人ひとりだれでもがもっている、もう一つの大切な命ではないかということである。

その両方の命を忘れないでほしいという思いから、いろいろな話をしていくのだが、特に声に力が入るところが次の言葉だ。

生きていくうえで、これだけは心に刻んでおいてほしいという前置きのあと、標語のように強調してしまう。

「死ぬな、殺すな（肉体的命）、踏みにじるな、踏みにじられるな（精神的命）」

私の強い思いがこもった言葉なのだが、語りながら、名状しがたい気持ちになってくる。なぜかというと、現実を

前に、あまりにも大きな矛盾を感じてしまうからである。

「〝殺すな〟。そう、人を殺してはいけないよ。殺してしまったら、何をどうしたって命は戻ってこない。本当に取り返しがつかないことだからね」

言うのは易しい。生徒たちの顔を前にして、胸がキリッと痛む。行うのは難しい。私たち大人は、一体どういうことをしているのだろうか。

大人は子どもに対して、「人を殺してはいけない」と言いながら、実際にやっていることは、まったく正反対のことだ。全然、説得力がない。

たとえ一人でも人を殺してしまったら、当然のことのように逮捕され、裁判にかけられ、罪に服す。しかし、たくさんの人を殺すことが目的となり、殺せば殺すほど誉められ、褒美までもらえる戦争というものがある。

私が子どもだったとき、どうして大人は人を殺しちゃダメと言いながら、戦争という大量殺人するんだろうと、ずっと疑問に思っていた。いま自分が大人になって、子どもたちからそう問われたら、返す言葉が見つからない。

人間（生きもの）の命を奪うために、莫大な国家予算をかけて作り出される数々の〝大量破壊兵器〟。

それらを実際に使っているシーンをテレビや新聞などの報道で目にすると、命の大切さを訴え続けることが虚しくさえ思えてくる。

アメリカによるイラクへの攻撃。

子どもたちの間で諍い（いさかい）が起きると、暴力ではなく、ちゃんと話し合って解決をするようにと諭す（さとす）大人が、気にいらなければ相手を問答無用に叩き潰していいのだということを、デモンストレーションしているようなものだと思った。

イラクのフセイン元大統領の息子たちを探し当てたときのこと、アメリカは、身柄を確保するのではなく、殺害するために凄まじい爆撃を加えていた。

その映像を観ながら、「殺すな」という言葉を子どもたちに言うことの嘘々しさを感じた。恥ずかしいことである。

「死ぬな」と言っても、戦争になれば殺されてしまう。「殺すな」と言っても、同じく殺してしまう。「踏みにじるな、踏みにじられるな」と言っても、戦争ほど人間を踏みにじり、人間が踏みにじられるものはない。

「命さえ忘れなきゃ」は、イコール「平和さえ忘れなきゃ」ということだと、つくづく実感する日々である。